



質素な小松藩主の墓。周囲の土塚の崩壊が進んでいる



県内最古の古代寺院といわれる法安寺の礎石

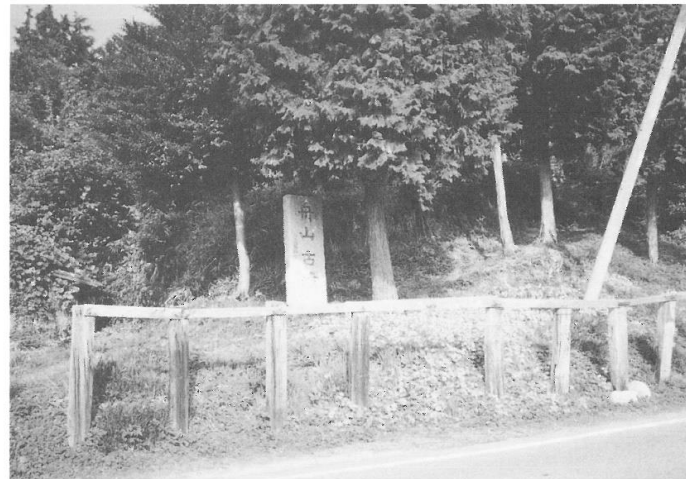
常識を打ち破り、平野の真ん中に築造された県内でも初めての例である。さらに隣接する松ノ元遺跡では八〜九世紀ころと推定される官道や県内で初めて条里制の遺構が確認されるなど、古代の小松の景観がかなり復元されることになった。こうした新しい事実からも、小松の地が古代以来の交通の要衝であったからこそいち早く先進的な文化を受容できたということがわかるのである。

その大久保遺跡から北東方向一キロメートルのところに法安寺がある。北川にある法安寺は飛鳥時代の創建とされ、県内最古の古代寺院であり、同時に県内最初の国指定史跡でもある。残された34個の礎石によって塔・金堂・講堂・中門の跡を確認できるが、それらは南北に一直線上に配置されており、聖徳太子が建立した大阪の四天王寺や奈良の山田寺などと同じ伽藍配置である。古代の周敷郡では多治比氏の勢力が卓越しており、この法安寺も多治比氏が建立したものであろう。現在この法安寺は千本ボタンの寺として知られており、毎年五月初旬には大勢の見

物客が訪れている。このようにこの地域は、県内で最も早く仏教文化の花が開いた地とも言え、ここからも文化の先進性が窺えるのである。

ところで、小松の町は、古くから西日本の最高峰である霊峰石鎚山の登山口としてにぎわう町として知られている。夏から秋にかけて登山者が多くいたが、昭和四十三年西条市に石鎚登山ロープウェイが完成したため小松町からの登山者はかなり減少した。石鎚山の歴史はずいぶん古く、真言宗を開いた弘法大師空海はその著書『三教指帰』の中で阿毘法師が石鎚山に登って厳しい修行をしているが、この書物は空海の思想的な立場を明らかにしたものであり、この阿毘法師はほかならぬ空海自身であったろう。さらに天台宗を開いた最澄の高弟で伊予国風早郡出身の光定がいるが、彼は横峰寺の開山第二世とされているように彼もまた石鎚山で修行をしていたと思われる。

『日本文徳天皇実録』嘉祥三（八五〇）年条には上仙や杓然という仙人の名がみえるが、彼らは石鎚山での修行によって鬼神を思うままに従わ



古墳後期の群集墳が残されている舟山古墳

霊峰石鎚山を背に、瀬戸内海の燦灘に面した小松町は古くより文化の拠点として栄えた町である。自然の懷に抱かれ、緑豊かで人情の厚い町でもある。古代より脈々と伝えられた歴史の一端を紹介していこう。

小松川に沿って立地する仏心寺の周辺には小松川藤木遺跡をはじめ縄文遺跡が各所に分布する。古墳時代の遺跡には三島神社の丘陵上に立地する舟山古墳や高鴨神社裏にある大日裏山古墳、かつては五〇基以上あったといわれる石根古墳群などがあり、古くから開けた地域として知られていた。最近のバイパス工事に伴

う数多くの発掘によって小松の古代の姿がより一層明らかになってきた。妙口の大久保遺跡で紀元前二世紀頃に中国か朝鮮半島で生産されたと考えられる鉄斧が四点出土している。これらから大陸の文物が北九州から瀬戸内海を通って海路で東方に伝わる場合、大久保遺跡周辺地域が瀬戸内海における受け入れポイントとして重要な位置を占めていたことがわかる。また同遺跡の水田で全国でも最古の部類に属する三世紀末に築造されたと推定される前方後円墳が確認された。これも従来前期の前方後円墳は丘陵上に築かれるという

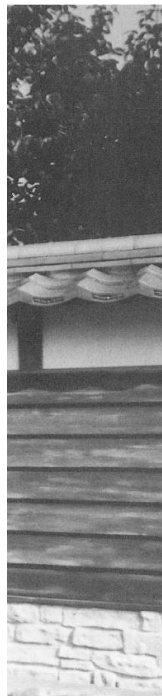
小松町の 今昔

白石 成二

特集
道前平野の歴史と文化



伊予聖人と讃えられた近藤篤山の邸宅



小松藩の藩校養正館

せるようになったとあるように、こうした霊山に籠ることで常人にはない聖なる力に身をつけることができ、聖や菩薩になることができると信じられていた。平安末期には後白河法皇によって編纂された『梁塵秘抄』に「聖の住所はどこぞ、大峯、葛城、いとものつち、箕面よ、勝尾よ、播磨の書写山、南は熊野の那智新宮」とみえ、石鎚山は「いとものつち」と記されている。この頃にはすでに修験道の道場あるいは霊山として全国に名だたる地位を確立していたのである。

中世の小松は讃岐の細川氏と伊予河野氏の攻防の地となったが、江戸時代には一柳直頼が寛永十三（一六三六）年に入封し、以後、小松藩一万石の陣屋町として発展した。陣屋は東西六三間、南北一〇〇間であったと言われるが、現在は太鼓櫓の跡に記念碑と案内板を残すのみとなっ

ている。七代藩主頼親は小松藩の文教の興隆につとめ、享和三（一八〇三）年に自らの師として宇摩郡小林村（現在の土居町）出身の朱子学者近藤篤山を招き、その翌年に藩校を整備して養正館と改称した。藩士はもとより農民や商人など庶民にも聴講を認め、広く教化につとめ、篤山は「德行天下第一」と称されるようになった。ここに小松藩に好学の気風が生まれるとともに有能な人材を多く輩出した。現在、県指定史跡となっている近藤篤山の旧邸が整備され、「伊予聖人」と讃えられた篤山の生活を偲ぶことができる。小松藩主一柳氏の歴代藩主は神仏を厚く崇敬したため、町内には一柳氏に關係する寺社が多い。初代直頼が本殿を再建した三島神社、二代直治が菩提寺として創建した仏心寺、四代頼邦が町内の安隠と繁栄を祈って建立した常盤神社、大和葛城山の高嶋大御神の分霊を祭り、藩主の保護を受けた高嶋神社など数多くの史跡がある。

現在、四国八十八か所霊場の寺院がこの小さな町小松に修験の総本山

とされる六十番札所横峰寺、子安大師の名で知られる六十一番札所香園寺、十一面観音像を本尊とする宝寿寺の三か寺もある。春や秋には遍路客でにぎわい、夏には白装束に身を包んだ行者たちが石鎚の山頂をめざしてにぎわうなど、小松町は現在でも信仰の里である。四国遍路を世界遺産に登録しようとする運動がおこなうなど、自分を深くみつめたり、やすらぎを求める時代になってきたが、小松の町は「心のいやし場」としての役割を今後期待されるようになると思われる。

しらいし・せいじ 一九五二年越智郡伯方町の生まれ。現在、愛媛県立小松高等学校教諭。社会科「一般を研究するソーシャル・リサーチ研究会の代表（事務局）」「愛媛県史」「松山市史」「愛媛県風土記」など古代史の分野を執筆。伊予国の古代をテーマに研究しているが、現在は「古代伊予国の神仙思想」に取り組んでいる。「文化愛媛」四一号では、趣味ジョギングと書いたが、走ること五年、足を痛め挫折。趣味テニスに訂正します。